

個別テーマの探究を軸とした 「総合的な学習の時間」活性化のプロセス —京丹波町立和知中学校「和知ゼミ」1年目の実践記録—

岩崎保之 谷口恭子
(教育学科教授) (京丹波町立和知中学校校長)
今井俊彦 内藤武司
(京丹波町立和知中学校教諭) (京丹波町立和知中学校教諭)

本稿は、個別テーマの探究を軸とした学習形態によって中学校の総合的学習を活性化させるプロセスを、京丹波町立和知中学校が2021年度に実践した「和知ゼミ」を対象とし、他校での追試も可能な実践記録として公表するものである。生徒の興味・関心を第一義とし、探究のプロセスをゼミ形式で丁寧に指導することで、生徒はもとより教職員も総合的学習の意義を前向きに捉えるようになることが示された。

キーワード：総合的な学習の時間、総合的学習、探究、論題作成、ゼミ形式

1. 背景・目的

2021年度から全面実施された中学校学習指導要領においては、総合的な学習の時間（以下「総合的学習」と略記）で探究のプロセスをより一層丁寧に指導することを求めている。

京都府船井郡京丹波町にある町立の和知中学校では、2021年度、地域の伝統芸能をテーマとしたそれまでの集団的な探究から、生徒の興味・関心に基づく課題（以下「個別テーマ」と略記）を探求する総合的学習「和知ゼミ」の実践に取り組んだ。

個別テーマの探究は、高等学校で多く見られる学習形態である。しかしながら、中学校では実践事例に乏しく、とりわけ生徒が自分の探究テーマを設定するまでに至る指導プロセスについては、先行する実践報告においてブラックボックス的な扱いとなっている。

本稿ではこれより、和知中学校の谷口校長が「和知ゼミ」の構想に至った経緯（第2節）を述べた後で、今井教諭（第3節）と内藤教諭（第4節）が単元や授業の実際を述べる。それを受けた谷口校長が1年目を評価（第5節）し、岩崎が本実践の今日的な意義（第6節）を検討す

る。個別テーマの探究を軸とした学習形態が中学校の総合的学習を活性化するプロセスについて、他校での追試も可能な実践記録として公表することを目的とする。

2. 「和知ゼミ」の構想

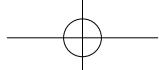
(1) 地域の特徴

京丹波町立和知中学校（以下、第5節まで「和知中」と略記）は、京都府中部の船井郡京丹波町の北端に位置する小規模校である。校区面積の約90%が山林で、その中央を由良川が流れる自然豊かな農山村地域である。

遠い過去には生徒数が600人を超える時代もあったが、2021年度の生徒数は43名である。校区の少子高齢化は今後も進み、数年後には全校生徒数が30名を下回る見込みである。

生徒は就学前より、ほぼ同じ集団で生活し、外から刺激を受けたり、競い合ったりする環境がほとんどないまま育ってきており、総じて真面目でおとなしい。

一方で、この和知という地域は、江戸時代から人々の暮らしと深く結びつきつつ大切に受け継がれている伝統芸能が息づく、文化レベルの



個別テーマの探究を軸とした「総合的な学習の時間」活性化のプロセス

高い地域もある。

その1つが、京都府無形民族文化財に指定されている「和知人形浄瑠璃」である。和知中では2004年度から、同じく伝統芸能である「和知太鼓」とともに総合的学習に導入し、地域の保存会の方から直接指導を受けて、学校内外で成果を発表してきた。

(2) 総合的学習の再構築

地域の特性に基づいて伝統芸能を総合的学習の中心に据えてきた和知中であるが、新しい学習指導要領の趣旨を踏まえ、カリキュラムを見直す必要があった。

そして、2020年度に着任した谷口が校長として感じた複数の印象が、「和知ゼミ」を始めるときにかけになった。それは、まず生徒は自分たちが取り組んでいる伝統芸能の何であるかをよく理解していないこと、そして、地域の良さも自らの良さにもあまり気づいていないということである。環境に多少の要因があるとは言え、生徒が知っている世界は限られており、学びの姿勢も受け身的である。そこで、総合的学習を再構築し、課題設定、情報収集、発信という「探究」のプロセスを学習の主体者として生徒に経験させたいと考えたのである。

(3) 「和知ゼミ」の構想

カリキュラムを構想する初期の段階においては、生徒に和知の伝統芸能や文化・歴史について理解を深めさせ“我がふるさと”的な良さに気づかせたい、地域が直面する課題とその解決策や持続可能な町づくりという視点を持たせたいと考えていた。また、地域人材との協働学習も想定していた。

しかし、校内で協議するなかで、地域課題を前面に出す学習は小学校段階でも多少は経験しているうえに、生徒自身の興味・関心という点では残念ながら現時点では的外れの感があるのではないかとの結論に至った。そこで、初年度においては生徒の興味・関心を尊重し、知的好奇心と探究心を喚起することを第一にした。

また、生徒一人に1台のタブレット型PCの

活用も始まったことから、「和知ゼミ」の中でもICTを駆使する学習活動を組織し、生徒にとってわくわくする学びができる時間にしようと考えた。

さらに、2021年春より京都女子大学の岩崎保之教授との縁を得て、校長や教員による協議会や職員研修会で意見を得ながら、少しづつ「和知ゼミ」の形を作っていった。

そして、まず1年目は探究的学習のプロセスを学ぶことを目標にする旨を教員間で共通理解し、2021年度から「和知ゼミ」をスタートさせることとした。

なお、和知中はクラス替えがないため、異年齢集団（いわゆる「縦割り班」）による活動を意図的に組み、生徒間の関係性をほぐしたり、構築したりすることで主体性や意欲を育むことを意識している。例えば、生徒会活動や掃除、行事を縦割り班で行っているが、「和知ゼミ」にも縦割り班を導入し、少しでもその効果を反映させたいと考えた。

3. 「和知ゼミ」の実際

(1) 「和知ゼミ」の設定

総合的学習の名称については、教員による複数の提案と投票を経て「和知ゼミの時間～和知で見つける自分、和知で探究、和知を探究～」とした。この名称には、ゼミ形式で学習を進めていくことを生徒に伝えるねらいや、和知で探究活動する意義を感じてほしいという教職員の願いが込められている。

(2) 目標の設定

「和知ゼミ」の目標を表1に示す。この目標は、和知中の目指す生徒像を軸として、『中学校学習指導要領解説—総合的な学習の時間編一』と『高等学校学習指導要領—総合的な探究の時間編一』（共に文部科学省）を参考に設定した。

特に、探究的な学習を通して形成される資質・能力として「自ら課題を設定すること」、探究のスキルとして「探究的な課題解決に必要な知識、技能を身につけること」、ゼミの内外での人との関わりの中で形成される資質・能力とし

て「協働的にとりくむこと」の3つを意識した。

表1 「和知ゼミの時間」の目標

探究的な見方・考え方を働かせ、自ら課題を設定し、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考え、将来を展望し、目標達成に向けて自ら挑戦しようとする。
・探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようとする。
・実社会や実生活、自らの興味・関心、和知地域の中などから問い合わせを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようとする。
・探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会や地域に参加しようとする態度を養う。

(3) 指導方針の構想

「和知ゼミ」の指導方針について、その概要と構想にあたって留意した点を表2に示す。

この構想にあたっては、『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（文部科学省：2010）と、岩崎教授から紹介された『学びの技—14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』（後藤ほか：2014）を主な文献として参考にした。

表2 「和知ゼミ」指導方針の概要と留意点

・少人数の強みを活かし一人一人の興味・関心に応じたテーマ（和知地域を含む）を探究する。
・縦割り班で論題作成まで行い、同じようなテーマの班を再構成する。
・教員は1つの班に1人つく、あくまでサポーターとしての役割に徹する。
・iPadを検索、思考ツール、表現ツールとして活用する。
・11月の小中合同発表会で、途中経過を発表する。
・レポート、論文、スライド、探究ノートといった成果物を残す。
・口頭発表、論文作成のどちらかを必ず行う。
・継続的に取り組みができるように、自分たちの探究活動についても振り返る。

(3) 計画作成の方針

計画作成にあたって最も苦慮した点は、生徒に探究的な学習の探究テーマをどのような形で設定させるかであった。

初期の構想では、地域性に焦点を当て、和知地域と生徒の興味・関心とを関連させた探究学習を計画していた。しかし、そのようにして設定されたテーマが生徒の興味・関心に必ずしも当てはまらない、もしくは当てはめにくい可能性があることが考えられた。

一方で、生徒一人一人の興味・関心のみに主眼をおいた場合でも、生徒の興味・関心によって選ばれた個別テーマが必ずしも探究的な学習とはなり得ないのではないかという懸念があった。

「和知ゼミ」では、生徒自らが課題を設定したり、課題を解決して得られた成果を発表して振り返ったりするという探究のプロセスのなかで、本来の学びの楽しさや、学校での学びと世界がつながることのおもしろさに気づいてほしいという願いがあった。

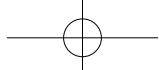
願いを実現するためには、生徒が自分の探究におもしろさややりがいを感じる必要がある。また、生徒が学習に責任を持つためには、真に探究してみたいという思いが必要である。そのためには、「和知ゼミ」を担当する教員が、生徒一人一人の興味・関心を最大限尊重しながら生徒の探究を支援する必要があると考えた。

そこで、テーマを設定する場面では、生徒一人一人の興味・関心をもとに探究を始めることとし、マインドマップやブラウジングといった手法を用いて、生徒自らの手で探究的な学習として成り立つ論題の作成ができるように留意した。

(4) 単元計画・授業計画の作成

これまでに述べてきた思いや願い、目標、指導方針に基づいて作成したのが、表3に示す単元計画である。

「和知ゼミ」の大きなねらいは探究的な学習であるので、全体を通して、探究のプロセスを踏襲するような計画となっている。生徒の興味・関心を主軸とするため、探究のテーマ設定、目標設定には多く時間をとった。



個別テーマの探究を軸とした「総合的な学習の時間」活性化のプロセス

表3 「和知ゼミ」 単元計画

探究の過程（時数）	月	内容	
目標設定（7）	6・7	1. 探究ガイダンス 2. マインドマップでテーマ探し 3. ブラウジングで周辺知識探し 4. 論題作成 5. 探究スケジュール管理	
情報収集 (1) 家庭での学習を含む	8・9	6. 担当ごとの情報収集（図書館、ウェブ、統計資料、インタビュー、フィールドワークなど）	
取捨選択（3）	9	7. シンキングツールを使って集めた情報の取捨選択	
まとめ（6）	10・11	8. 発表資料の作り方講座 9. 効果的なスライド作成 10. 良い発表の仕方講座	8. 論文の書き方講座 9. 論文の構成と作成（序論～結論） 10. 参考文献とアブストラクト（抄録）
発表（1）	11	11. 口頭発表会、冊子作成など	
振り返り（1）	12	12. 探究の振り返りと来年に向けての展望	

表4 「和知ゼミ」 授業計画（一部）

時 間 予 定	場 所	授 業 者	形 態	本時の目標	内容
1 6 月 2 日	体 育 館	探 究 担 当	縦 割 り	・探究の時間の流れを理解する。 ・なりたい自分から目標を設定して個別に研究するテーマを模索する。 ・自己の生き方を考える。	「和知ゼミ」の説明（世界で起こっていること、どう生きていくか）と目標設定 ① 授業ガイダンス（10分）：概要、流れの確認、今日の内容の確認 ② 「Did you know? ~世界で起きていること~」「SDGsについて」（5分） ③ 目標設定（20分）説明：人生は探究の連続。中学生の今、「なりたい自分」の探究をスタートしよう。 1 漠然と夢を描く。 2 大きな目標を具体的に決める。 3 プロセスを考える。 4 小さな目標を決める（……を研究する）。 ④ 交流（10分）：班で目標を交流する。 ⑤ 振り返り（5分）：今日の振り返りを書く。
2 ・ 3 16 日	体 育 館	探 究 担 当	縦 割 り	・マインドマップの手法とよさを理解する。 ・研究テーマをマインドマップから絞り込む。 ・自分について深く知る。	「マインドマップでテーマ探し」 ① 説明：自分の興味・関心を探究テーマにするために、マインドマップで自己分析しよう。（5分） ② マインドマップの説明（10分） セントラルイメージ：自分 メインプランチ：得意なこと」「好きなもの」「興味・関心」「好きな教科」「目標」「性格」「最近気になること」「将来の夢」「和知」 ③ マインドマップ作り（70分）作成後、研究してみたいテーマに3つ選ぶ。 ④ 交流（10分）：班で交流する。 ⑤ 振り返り（5分）：今日の振り返りを書く。
4 6 月 23 日	各 教 室	各 担 当	縦 割 り	・ブラウジングの手法とよさを理解する。 ・テーマについて周辺知識を調べ、より具体的に探究できるようにする。	「ブラウジングで周辺知識探し」 ① 説明：周辺知識を見つけるためにブラウジングしよう（5分） ② ブラウジング（30分）：図書室、インターネットなどで調べる。 ③ 交流（10分）：班で交流する。 ④ 振り返り（5分）：今日の振り返りを書く。

5 ・ 6	6 月 30 日	体 育 館	探 究 担 当	縦 割 り	<ul style="list-style-type: none"> 論題作成の手法を理解する。 自分の研究テーマからより良い論題を作成する。 	<p>「論題作成」</p> <ol style="list-style-type: none"> 説明：自分の研究テーマから問い合わせを立てる。(15分) <ul style="list-style-type: none"> Yes/Noで答えられるものにする。 論題作成ルールを示す。 論題作成(70分) <ul style="list-style-type: none"> 5W1H ワークシートに書き込む。 書き込んだワークシートから論題を決定する。 交流(10分)：班で交流する。 振り返り(5分)：今日の振り返りを書く。
7	7 月 7 日	体 育 館	各 担 当	テ マ 別	<ul style="list-style-type: none"> テーマ別のメンバーと交流する。 自分の探究計画について大きな見通しをもつ。 	<p>「探究スケジュール管理」</p> <ol style="list-style-type: none"> 説明：探究の方法とスケジュールを自分で管理しよう。 自己紹介と作成した論題を、同じようなテーマ別に分かれて交流する。 探究計画について、情報収集の方法を担当教員と打ち合わせしながら、必要事項を列挙する。 必要事項とまとめ・発表の日時を確認してスケジュールを作成する。

授業計画については、表4に1～5時間目についての詳細な内容を抜粋して示す。

(5) 授業の実際 (2・3時間目)

本項以降では、1年目の「和知ゼミ」で最も力を入れて指導した論題作成について、生徒の事実をもとに授業の実際を述べる。

2時間目では、生徒が自らの興味・関心が何なのかを探す手法としてマインドマップを提示し、自分自身と向き合う中で個別の探究テーマを設定できるようにした。

生徒が作成したマインドマップを図1に、マインドマップの作成を終えた生徒の振り返りを表5に示す。

生徒は、マインドマップの中から気になるキーワードを3つほど選び、探究のテーマとした。振り返りを読み解くと、生徒は論題作成の

プロセスを通して自分自身と向き合う中で、自らの興味・関心を掘り起こし、自分らしい探究テーマを設定していた。

表5 マインドマップの振り返り（一部）

- ・自分がこれから探究していくことが（決めることが）できてよかったです。特に農家になるためにもカエルはすきになりたいです。
 - ・自分の好きなことや気になることとかを、じっくり考えられてよかったです。あとみんなと楽しくできた。
 - ・自分のことを考えることは難しいけど、自分がわかった。
 - ・自分の気になっていること、やりたいこと、自分のことについて改めてじっくり考えられたのでよかったです。これをきっかけに、自分の将来のことについてよく考えてみたいなと思いました。

(6) 授業の実際（4時間目）

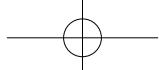
探究が単なる調べ学習とならないようにブラウジングの手法を提示し、マインドマップで選んだテーマを深められるようにした。

当初の計画では、図書室の書籍からブラウジングを行い、学校図書の利活用と連携するつもりだったが、実際は図書の利用は少なく、ウェブによる収集が主であった。

この点については生徒の書籍による情報検索の煩雑さといったイメージや学校図書の蔵書数の少なさといった環境要因が考えられる。次年



図1 マインドマップの実際



個別テーマの探究を軸とした「総合的な学習の時間」活性化のプロセス

表6 生徒が作成した論題（一部）

- ・日本の森林は減らす必要があるのか。
- ・絶滅危惧種のニホンオオカミは救うことができるか。
- ・人が美味しいと感じるのは見た目より旨味か。
- ・ドラえもんの道具は実現可能か。
- ・私がカエルを嫌うとカエルは傷つくか。
- ・鯨の胃の中は人間と同じように胃カメラを使うのか。
- ・和知人形浄瑠璃は世界に発信可能か。
- ・建築士のパース図は努力よりセンスなのか。
- ・家の設計のAI化によって設計の幅は広がったのか。
- ・若者の体力低下は本当か。

度以降どのような形でブラウジングを行うか検討していきたい。

（7）授業の実際（5・6時間目）

ブラウジングを終えてから、テーマを1つに絞って論題を作成する学習活動を組織した。具体的には論題作成の手法を提示し、2時間かけて論題を作成した。

実際に生徒が作成した論題を表6に、論題作成を終えた生徒の振り返りを表7に示す。

ここでは、仮説を含む問い合わせの形にする重視した。「はい」か「いいえ」で答えられる形に論題を作成することで、探究する対象が限定され、生徒の興味・関心が探究のプロセスにのりやすくなるだろうと考えたからである。

しかし、実際には、仮説を含む問い合わせの形にする作業をすることで、自分の本来探究したいテーマの内容から外れていき、自分の探究に魅力を感じなくなっているような生徒が見受けられたように感じた。

生徒の振り返りから、この論題作成が「和知ゼミ」の中で最も生徒にとって苦しむ場面であったと思われる。次年度、仮説を含む問い合わせにこだわるかどうかを検討する必要がある。

表7 論題作成の生徒の振り返り（一部）

- ・まだ完璧に論題を決めることができなかつたけど、だいぶ論題や調べたいことがわかつてきただ。
- ・一応課題は決まったのでよかった。そこからどう調べていくのか、どうまとめていくのかを考えるところになると思うけどそこも難しそう。
- ・僕は、論題を設定してみて、キーワードで5W1Hを使って、取り出される論題を作るのが、大変だった。
- ・YES・NOで答えられるように論題を作るのが難しかった。

（8）授業の実際（7時間目）

論題が決定した時点で、似たテーマごとに2～6人で班を再編成し、ゼミの担当教員にはそのテーマとの関連から1人ずつを配当した。そして、探究の方法とスケジュールをゼミで検討する時間を1時間設けた。

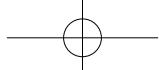
しかし、この時点で論題が探究として成り立っている生徒が少なく、再編成したゼミで論題を作成することになったという声が担当教員から多く寄せられた。

情報収集では計画のように様々な形で行われることを想定していたが、実際は、主にウェブを用いた情報の収集がほとんどで探究的な学習としては幅が狭まっていると感じる。これは、情報の収集手段を図書とウェブしか提示しなかったことと、探究の方法を考える時間を1時間しかとっていなかったことが原因と考えられる。情報収集の方法については課題としたい。

（9）授業の実際（8時間目以降）と総括

その後は、ゼミごとに発表をまとめたり、必要な情報を収集したりした。

単元計画では、まとめの場面でプレゼン発表と論文の班にわかれ、それぞれ彼らの手法を提示する予定であった。しかし、実際にはゼミの中だけでそれらの作業を進めた。これは生徒によって探究過程の進捗が異なっていたためである。



発達教育学部紀要

また、論文作成にあたっては国語科などと連携し、授業内でも「文章の構成について」などを指導するようにした。

本稿の執筆現在（2021年11月初旬），生徒は自分の発表をまとめて、発表会にむけて準備をしているところである。発表会の前には京都女子大学とビデオ会議でつなぎ、生徒のプレ発表を大学生に見てももらう予定である。

そして、発表会後は、自分達の探究を振り返り、「和知ゼミ」を通して成長したことや今後に生かしていくことなどを可視化（見える化）する計画である。

以上、計画段階から授業を実施した実際の生徒の声をまとめた。検討すべき点や課題とすべき点はあるが、目標としていた「自分で課題を設定し探究する」ことは達成に近づいていると感じている。

今年度は、探究を軸とした学習に初めて本格的に取り組んだことから、予定していた内容を変更したり、修正したりした部分があった。次年度以降、生徒の学びがより一層深まるように、カリキュラムの見直しをしていきたい。

4. 「和知ゼミ」取組の組織化と生徒・教員の変容

「和知ゼミ」では、和知中が取り組んでいる縦割りの異年齢集団にて学び合うとともに、小集団で個別最適化した研究が進められるように、各グループに一人ずつ担当教員を配置するという体制を取ることにした。

本節では、小規模校であることを強みと捉えゼミ集団を編成するまでの流れを述べる。

（1）探究的な学習の体制作り

4月～5月

特活部作成の縦割り班A～Hごとに、生徒が①自分が興味のあることを探し、②研究テーマ設定の方法について学び、③研究テーマ（案）を設定した。

6月

設定されたテーマを教員が9つのカテゴリーに分類し、ゼミ集団を再編成した。そして、そ

れらのカテゴリーに明るい教員をそれぞれ配置し、調べ学習を進めた。

7月

11月25日を総合的学習発表会と定め、そこが本年度一旦の研究発表をする機会であることと、その日までの見通しを生徒と共有した。発表の方法は、レポート、プレゼン、動画作りと、様々な方法を認めることとした。

8月

各自、資料集めやインタビューを実施した。

9月～10月

構成、章立ての仕方について学び、まとめ作業をした。

11月

ゼミ内発表、発表リハーサル、総合的学習の時間発表会。

（2）生徒の変容

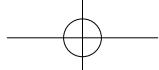
探究的な学びにおいて、教員の最たる願いである「生徒が主体的に学習へ向かう姿勢」の向上については、現時点でははっきりとした変化を捉えることはできていない。学習発表会が終了した時点で、本年度の振り返りとしてアンケートを実施して、生徒自身の言葉でそれぞれの変化を見取ることができればと願う。

しかしながら、国語科の教員より「小論文グランプリに向けた作文指導の際、文章を構成する力や、順序立てで説明する力が明らかに向上していると感じた。総合的学習において学んだスキルを用いて、自ら興味のあることについてよく調べ、考え、整理したことで、確実に力として定着していると感じる」という意見が寄せられた。

この国語科の例に限らず、各教科で得た知識を活用し、アウトプットすることにより教科横断的に知識が再構築されるというのは、生徒にとって、小集団による探究的な学びの大きなメリットであると思われる。

（3）教員の変容

新しいことを始めるというのは指導する教員の負担感を招くこととなり、年度当初は先行き



個別テーマの探究を軸とした「総合的な学習の時間」活性化のプロセス

を案じている教員も見られた。

しかし、生徒達のひた向きに取り組む姿や、力がついていく姿を見ることで、教員も徐々に前向きになっていった。なかには「主体的に学ぶ姿を生徒に見せたい。一緒に行き詰まったり、ひらめいたり、悩みながら研究を進めていきたい」という自身の純粋な思いから、自らも課題設定をして研究を進め、フィールドワークに汗を流す教員もいた。壮大に3ヵ年計画で研究も進めたいという意気込みであり、その姿は生徒たちの模範になるものと思われる。

現時点では、職員室での声を拾うことしかできていないので、学習発表会後に本年度の振り返りとしてアンケートを実施し、意見を次年度に活かしたいと願っている。

アンケートには次の項目を設け、年度当初に設定した目標の達成度や探究のプロセスにおける学びの具体的な実感を明らかにする予定である。

生徒の変容を可視化（見える化）することで、生徒だけでなく教員も探究的な学びの効果をより前向きに捉え直し、「和知ゼミ」への取組を改善していくことが期待される。

生徒用

- ・好きなことについて調べるというのは楽しかったか。
- ・着いたと思う力はあるか。
- ・調べたことと関連のあることへの知識の広がりがあったか。
- ・来年度は今年度の研究をどのように生かすか。
- ・成果報告の方法とそれまでの期間についてどう感じたか。等

教員用

- ・生徒の様子は前向きであったか。
- ・生徒の変容を感じたか（身についたと思われる力は何か）。
- ・教員自身に心の変化があったか。
- ・成果報告の方法とそれまでの期間についてどう感じたか。等

5. 「和知ゼミ」1年目の評価と今後の展望

(1) 1年目の評価

「和知ゼミ」の構想の背景にはいくつかの要

素があった。和知中の地域性、生徒の実態、新学習指導要領の実施に加え、もう一つ大きな要素は教員であった。

和知中は小規模校で教職員数も管理職・事務職員を含めて12名と少なく、数名の非常勤講師で各教科の補充を行っている学校である。ひとり一人の役割が明確で、出番が多いことは生徒と同じで、それを小規模校の強みに転じることを学校経営では常に意識している。

その中で校長とともに2020年度に着任したのが、共著の2名の教員である。新しいことを始めるには「よそ者」「若者」等と言われることがあるようだが、探究的な学びをスタートさせるにあたり、共著者の1名は校内での総合的な学習の時間を包括的に担当しており、もう1名は自分が研究家肌の教員であることから、彼らを軸に何か新しいことができるのではないかと思ったことが発端であった。

折しも学校現場は新型コロナウイルス感染症への対策で前例踏襲を見直さなければならないことが多くなり、「変化」に対する抵抗が少し弱まっていた。「和知ゼミ」の原型を考え始めたのがそのタイミング（2020年秋）であった。

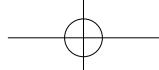
現時点で評価の根拠となる資料を示すことはできないが、1年目をスタートさせたことそのものに意義があったと考えている。その意義とは、自ら課題設定し、解決して得られたことを成果物として形に表し、他者に発表するという一連の探究的学習のプロセスを全ての生徒が経験したことである。この経験は高校や大学に進学した時にも生きてくると思っている。

何より、テストの得点を意識した勉強では味わえない面白さを経験してくれたのではないかと期待している。実践してみて課題も多く見つかったが、それも次年度への改善や深化に生かす材料としての成果と考えたい。

また、教員の配置を工夫することで、学校全体としての取組となり、参画意識を高めることができたと感じている。

実際のところ、設定日の水曜日6限は、教員が総がかりで「和知ゼミ」に取り組んだ。

探究のプロセスで最初の閑門は、論題作成で



あった。無理もない。多くの中学生は、探究したい問い合わせる以前に、自分自身の興味・関心の向く方向さえ分からるのが実態である。しかし、何もない地を耕すように興味・関心を掘り起こしていく過程は自分との対話でもあり、生徒にとっては楽しかったに違いない。

前節までに見たように、論題作成以降の学習の質に個人差が見られたことや指導方法の改善等は、今後の改善に向けた課題として残されている。しかしながら、教師が与えた問い合わせなく生徒が自ら見つけた「知りたい」を探究したという点で、1年目の「和知ゼミ」は十分意義があった。

さらに、中核をなす教員の能力を十分に發揮させることができたのではないかとも思っている。

「和知ゼミ」の構想を練る段階は、新しい教育を我々が探究していく始まりでもあったし、その過程で行き詰まり、皆で頭を悩ませたのも探究的活動であったのではないか。教員の中には自らも課題を設定し、生徒とともに取り組み始めた者もいる。確かに多忙感が増した面はあるだろうが、そのような教員の出現は「探究」を前向きに捉えての反応であると思うし、こうした動きも含めて「和知ゼミ」が学校全体のものになったことに手応えを感じている。

(2) 今後の展望

生徒と教員の振り返りをもとに今後の課題を整理したい。そのうえで、計画を見直したいと考えている。

1年単位で計画すべきか、多年計画にすべきか、まだ判断しかねている。しかし、1・2年生においては、1年目の学習成果を基礎にして発展的あるいは関連ある課題を設定し、継続して取り組んでいくことが望ましいのではないかと考えている。

課題解決の手法について、今後はもう少し広げられないかと考えている。具体的には取材や図書資料や新聞の活用等である。図書関係については、学校図書館の蔵書だけでは無理なので、公共図書館等との連携が必要である。取材

やフィールドワークも教員のサポートなしでは実現しにくいと思われる。これらの問題をどう解決するかは、我々の探究課題ともいえる。

また、情報を比較する力やクリティカル・リーディングの力も生徒に身につけさせたい。情報過多の時代を生きる者にとって、大人も含め必要な力である。これは日頃の各教科の授業においても十分できることだと思う。「和知ゼミ」の時間だけではなく、あらゆる教育活動に探究的学習の視点をもった指導を、ほんの少し取り入れることで生徒は変わるはずである。

最後に、たとえ教員が入れ替わっても「和知ゼミ」を継承していくシステムづくりを今後数年かけてやっていきたい。やがて「和知を探究」する生徒も現れるに違ないと期待して。

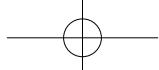
6. 「和知ゼミ」1年目に見る総合的学習の活性化に向けた取組の意義

岩崎（2021）は、総合的学習を学校全体で活性化する際に校長とミドルリーダー教員が担う役割を明らかにしている。結論のみを端的に示せば、校長もミドルリーダー教員も地域との関係構築や連携・協働に尽力するとともに、校長は方針を示し、ミドルリーダー教員はその方針に基づいて関係する教員と協議しながら、総合的学習の計画を明確化するという役割である。

京丹波町立和知中学校は、確かな伝統と豊かな文化に根差した地域にあり、住民が学校に寄せる期待や伝統芸能の継承に対する思いが強い。このような地域と学校との関係は、とりわけ過疎や人口流出に悩む山間地域において多く見られる事象であり、総合的学習は地域行事への生徒の参加をゴールとした取組として代々受け継がれている場合が多い。

総合的学習の単元を構想する際には、2つのベクトルが考えられる。1つは体験活動が先にあってそれに探究のスパイラルを載せるというベクトルであり、もう1つは探究のスパイラルを先に見通してそれに体験活動を載せるというベクトルである。

谷口校長は、学習指導要領の完全実施、GIGAスクール構想の展開、新型コロナウイル



個別テーマの探究を軸とした「総合的な学習の時間」活性化のプロセス

ス感染症への対策という3つの環境の変化を契機として、和知中学校がそれまで採用していた1つ目のベクトルを2つ目のベクトルに変えて総合的学習を組み立て直そうと試みた。そして、この試みが単に総合的学習における探究の充実だけに留まらず、生徒や教職員の意識も含めた学校全体の改革にもつながるであろうことを見通したことであった。

谷口校長は、試みを確かな取組にするため、着任後1年間をかけて地域関係者や有識者との関係構築に努めつつ、育成を目指す生徒の姿やそのための教育方針を折に触れて話題にし、徐々に教職員の意識を2つ目のベクトルに変えていった。

また、いわゆる実働部隊である今井教諭や内藤教諭は、谷口校長を交えた協議を繰り返しながら、文献や大学等の有識者にも情報を求めつつ2つ目のベクトルを具体的な単元計画や指導計画に反映させていった。その際、自ら率先してICTを活用した授業を行ったり、生徒の学習の様子を動画に編集して共有したりして、具体的な生徒の姿を通して「和知ゼミ」の意義やおもしろさを同僚の教職員に伝えようと尽力していた。

このような谷口校長をはじめとする和知中学校の教職員の姿は、前述した1つ目のベクトルに基づく“前年度踏襲型”的総合的学習を一旦

括弧に入れ、生徒と教職員が同じ探究者として新たな自分像、生徒像、教職員像、学校像、和知像を紡ぎ出していこうとする挑戦的取組であり、新しい学習指導要領における総合的学習や学校改革のリーディング・モデルとして位置づけることができよう。

なお、この「和知ゼミ」は、副題に「和知で見つける自分、和知で探究、和知を探究」を掲げている。1年目である今年度は、探究のプロセスで最も難しいとされる論題作成にゼミ形式による指導で丁寧に取り組み、1つ目の「和知で見つける自分」に迫った。2年目以降は「和知で探究」「和知を探究」にも迫ることで、地域のニーズ（伝統芸能の継承）と学校のニーズ（探究の充実）との融合、すなわち2つのベクトルが“和知の未来”という新たな極を目指して振れていくことを期待したい。

文献

- 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子（2014）『学びの技—14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版会。
文部科学省（2010）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』文部科学省。
岩崎保之（2021）中学校「総合的な学習の時間」を活性化させる校長及びミドルリーダー教員の役割』『京都女子大学発達教育学部紀要』17, pp91-101.